

「長嶋と古稀歩む」 大西よしき

みずずかる信濃を染むる蕎麦の花

佛花なほ寒九の水に反り返る

柔道着寒林に声残しゆく

テレビてふ怪物とゐて小正月

そば処湯気に春の香貫ひけり

マスクして大胆になる怖さかな

新作の鬼平に酔ふ春灯

涅槃西風どこ吹く風の余生なり

春帽子ひさしを背ナの若さかな

桜葉降るしたたかにまた生きん

根元まだ円く乾きて青時雨

茶筌切り茄子紺極め揚がりけり

反りの美の棒高跳びや今年竹

浮蓮やキャッチャーフライ受くる態

経過良しナース溜りの水中花

濃き太郎淡き次郎や椎の花

暮長嶋と古稀歩みけり

茄子の馬母の小言を乗せてくる

日照雨来て臭木の匂ふ森に入る

肩甲骨ぐるぐる回し今朝の秋

燈火親し妻と使ひし電子辞書

婚支度障子貼ることより始む

掃苔と書いて例会欠席す

吼ゆる犬さやかに制し検針婦

世代交代病葉を掃いてをり

定位置の秋扇坐し部屋締まる

有難うそのひと言の冬ぬくし

花菰の壺庭灯す歯切れよし

乱心と思へるほどのこぼれ萩

風邪の妻臥して指図の多弁なる